

■山田寅次郎 国際親善家、実業家。日本沖でのトルコ軍艦遭難に、義援金を募集して届け、以後、両国間の交流に尽力。

やまだとらじろう

薩長同盟・1866＝ 上州沼田藩の家老中村雄左衛門の次男として江戸の上屋敷で生まれる。

明治維新・1868＝ 2歳：

文明開化の東京で育ち、

明治6年政変 1873＝ 7歳：

初の民間工場1875＝ 9歳：

漢学・英語・ドイツ語・中国語を次々学んだ上、貿易都市横浜で、英語に磨きをかけるとともに、フランス語を学び、外国人と交際、

明治14年政変1881＝15歳：

茶道宗偏流七世山田宗寿の養子となり、

岩倉具視没・1883＝17歳： 養父が死去したため、跡を継いだ。

秩父事件・1884＝18歳：

陸羯南らの{日本}に寄稿し、幸田露伴や尾崎紅葉とも交流。

帝国憲法発布1889＝23歳：

帝国議会始・1890＝24歳：

*和歌山県串本沖で台風巻き込まれたトルコの軍艦が沈没、流れ着いたトルコ兵を見て、町民が総力挙げて救出活動に取組むも、69人に留まり、587人が死亡した。このエルトゥールル号遭難事件が報道されるや、日本人の同情世論が沸騰、政府は現地に軍艦を派遣して葬儀と埋葬を行った上、生存者を軍艦で本国に送り届けた。東京で書生だった寅次郎は、陸羯南や福本日南ら著名なジャーナリストに支援を依頼して、義援金集めに奔走し相当額が集まる。青木周蔵外相に自ら届けに行くのが良いと言われ、

大本教・・・1892＝26歳：

*海軍省の船で横浜港を出発、ポートサイドで下船し、威儀を正してエジプト首相の便宜を得、ピラミッド等視察後、オスマン帝国の首都イスタンブールに到着し、スルタンに拝謁、中村家伝来の甲冑などを寄贈、将来の通商のためと懇請され、士官への日本語教授と引換えにトルコ語を学ぶため、そのまま留まる。

郡司千島探検1893＝27歳：

日清戦争始・1894＝28歳：

松隈内閣・・・1896＝30歳：

トルコを訪れた(後の首相)寺内正毅がスルタンに拝謁するのを案内通訳。スルタンから日本の美術工芸品蒐集を依頼され、4年ぶりに一旦帰国して準備後、トルコに戻って貿易商を始めた。以後も、日本の要人がトルコを訪れるに当って、斡旋・段取り・通訳等のサポートに尽力するとともに、ヨーロッパのジャポニスム流行で貿易の方も順調に発展、この間、大阪船場の御寮人と結婚し、

田中正造直訴1901＝35歳：

教科書疑獄・1902＝36歳：

日露戦争始・1904＝38歳：

(後茶道家元を継いで宗伯となる)長女が誕生後も、妻子は大阪に残してトルコで活動、

*日露戦争が起きると、オーストリア公使だった牧野伸顕から依頼され、ロシアの黒海艦隊がボスポラス海峡を通るのを監視して暗号で打電したほか、沢田豊がスターだった軽業一座のロシア脱出もサポートした。イスタンブールでオスマン帝国の勲章をつけた写真が残る。トルコが葉タバコの産地だったことから、日本でたばこ製造をと志すも、この年、日本ではたばこが専売となったため、

日露戦争終・1905＝39歳：

満鉄発足・・・1906＝40歳：

アヲキ創刊・1908＝42歳：

伊藤博文暗殺1909＝43歳：

韓国併合・・・1910＝44歳：

大逆事件判決1911＝45歳：

明治天皇没・1912＝46歳：

第一次大戦始1914＝48歳：

トルコ起源のたばこの巻紙ライスペーパーを製造すべく帰国し、大蔵省に申請、

*許可を得て、関西財界人とともに東洋製紙株式会社を設立後、トルコへ戻る。

一時帰国、(宗伯を継ぐ)宗偏が誕生。

一時帰国し、監査役を辞任。

東洋製紙は大蔵省への納入を独占するに至る。

イスタンブールの風俗や慣習を日本に紹介する「土耳其画観」を発刊。

大戦が勃発したため、トルコから帰国した後も、両国の交流に尽力。

第一次大戦勃発でヨーロッパからのライスペーパー輸出が途絶えたアジアからの注文が日本に殺到し、

ロシア革命・1917＝51歳：

第一次大戦終1918＝52歳：

この年、富士製紙が、

続いて三島製紙が設立されたが、

大戦終結でブーム終焉、三島製紙は聖書や辞書の印刷用紙へ脱皮(現在なお国内シェアの半分を占める)、

大暴落・・・1920＝54歳：

原敬首相暗殺1921＝55歳：

水平社結成・1922＝56歳：

関東大震災・1923＝57歳：

護憲三派圧勝1924＝58歳：

治安維持法・1925＝59歳：

円本時代始・1926＝60歳：

金融恐慌・・・1927＝61歳：

共産党事件・1928＝62歳：

この年、オスマン帝国が滅亡してスルタンが廃止され、

トルコ共和国が成立。請われて茶道宗偏流の家元襲名し八世宗有となると、全国組織化に乗出し、

この年、東洋製紙が王子製紙と合併、

トルコ共和国との国交が樹立されると、大阪に日土貿易協会を設立して理事長に就任、

東京に日本トルコ協会の前身となる日土協会が創立される。

東洋製紙創業時の同志らと吹田製紙所を起こし、

株式会社とする。日土貿易協会でも申本の島へトルコ代理大使を招いてエルトゥールル号遭難で慰霊祭を実施。宗偏流機関紙(知音)を創刊。

世界恐慌・・・1929＝63歳：

駐日トルコ大使の離任・着任ごとに通訳をつとめる。

満州事変・・・1931＝65歳：

日土貿易協会理事長として、17年ぶりにトルコを再訪。かつて士官に日本語を教えていた寅次郎を見ていた初代大統領アタチュルクから招待される。

二二六事件・1936＝71歳：

日中戦争始・1937＝72歳：

吹田製紙が三島製紙と合併し、その取締役役に就任、

トルコ政府によるエルトゥールル号遭難慰霊碑の除幕式。

日米開戦・・・1941＝76歳：

三島製紙の社長となる。

戦時下、苦難の操業を続け、

敗戦・・・1945＝80歳：

新憲法公布・1946＝81歳：

新憲法施行・1947＝82歳：

極東裁判判決・1948＝83歳：

日米安保調印1951＝86歳：

メテ-事件・1952＝87歳：

なべ底不況・1957＝91歳：

産経「日本人の足跡2」、

*大蔵省専売局から三島製紙が表彰されるとともに、初代会長に就任。

会長も辞任して、以後は茶道に専念。

雑誌{キング}にインタビュー記事が掲載される。

山樵亭主人により伝記「新月=山田寅次郎」が書かれる。

没した。